

平成30年度教育事業

体験活動普及啓発事業

「さんべでミルクさんまい！ in Winter」

1 趣 旨

- ・地域資源を活かした体験活動の場を提供し、冬の三瓶地域の魅力に気づく。
- ・交流の家周辺で活動することで家族の絆を深めることや時間を守るなどの基本的な生活習慣を確立するきっかけづくりを行う。

2 事業の概要

- (1) 期 日 平成31年 2月23日(土)～ 2月24日(日) <1泊2日>
- (2) 会 場 国立三瓶青少年交流の家とその周辺
- (3) 協 力 福間牧場
- (4) 対 象 小学生とその家族
- (5) 参加者 30名(10家族) ※募集30名
- (6) 日程・研修内容

	13:00	14:00	17:10	19:00	20:00	22:30
2/23 (土)	はじめの会	【牧場体験】 かんじきをはいて、福間牧場へ！ 冬、牛さんは、どう過ごしている・・・？ 乳しぼり、エサやりなど、牧場体験に出かけよう♪	夕べのつどい	夕食・入浴	【選 択 活 動】 ①雪灯籠をつくろう！ ②天体観察会(サヒメル) ③自主活動(カブラの活動等)	入浴・休憩・就寝

	6:30	7:00	7:40	8:40	9:30	13:30
2/24 (日)	起床	朝のつどい 清掃	朝食・清掃	退所点検	【野外炊飯】 さんべでとれた牛乳で、あったかいシチューとパンをつくろう！ ダッチオーブンを使って、おいしいシチューとパンを作り、家族みんなで食べよう♪	おわりの会 解散

3 事業の特色

① 事業の特色

本事業において、牧場体験やアウトドアクッキングに「生産→消費」のストーリーを取り入れ、三瓶地域の資源を活かしたプログラムにすることで、参加者は、単なる「体験」ではなく、より充実した活動を行うことができる。また、意図的に数家族をまとめて1グループにすることで、家族同士の交流の促進を試みた。

② 運営のポイント

「牧場体験」では、観光牧場とは一線を画し、至近距離で牛に触れあうこと、牧場主の人柄に触れたり、実際の仕事内容や牛の一生を聞いたりする機会を設け、参加者がより「本物」に触れることができるように心掛けた。また、牧場主から話を聞く際には、寒い時期のため、交流の家に移動し、小さな畳の部屋を使用することで、互いの距離を縮め、より身近に話を聞くことができるようにした。

「アウトドアクッキング」では、ダッチオーブンを使ったパン作りが初めての試みだったため、

試作を重ね、作り方資料の作成や安全面の注意事項の整理を行った。

数家族がまとまって活動を行うため、家族同士の交流が生まれやすいように、はじめの会のアイスブレイクで参加者全体の雰囲気を和らげ、グループでの活動に移行しやすいようにした。

③ 広報のポイント

同日開催の他の教育事業と合同でチラシを作成し、1枚で同時に2事業の広報を行った。これにより、職員や広報先の負担の軽減、広報費の削減を図った。

4 参加者へのアンケート結果

(1) アンケートの集計

(%)

(2) 参加者の声

	満足	やや満足	やや不満	不満
事業全体	80	20	0	0
プログラム	70	30	0	0
運営	70	30	0	0
職員の対応	100	0	0	0

- ・牛に触れて、生きもののあたたかさを感じ、心にぐっとくるものがあった。
- ・牛乳をもっと味わって飲もうと思った。
- ・アウトドアクッキングでは、手順が簡単なのに、とても美味しくできた。
- ・グループでの活動は、最初は戸惑ったが、良い人ばかりで楽しく過ごせた。

5 成果と課題

《成果》

- ・全体の雰囲気づくりに工夫を凝らしたことから、家族の枠を超えて交流を深めることができた。同時に参加者側と運営側の関係性もその距離が近くなったため、参加者から事業に対しての良い点や改善点などについて生の声を直接聞け、今後の事業運営に活かせる視点を得ることができた。
- ・牧場体験や雪灯籠づくりなど、参加者が普段体験することのできないプログラムを提供することができ、冬の三瓶地域の「ヒト・モノ」の魅力を発信することができた。
- ・アウトドアクッキングでは、今回初めてダッチオーブンを使用するパン作りを行った。試作を重ねて、新たに家族やグループで楽しめる活動プログラムの開発に繋げることができた。

《課題》

- ・申込者92名に対して、活動場所による制限等から、多くの申込者をお断りした。今後、募集人数を増やして実施することができないか検討するとともに、同規模で行うようであれば、締め切りを早めに設定し、申込者に早く結果を通知できるようにしたい。
- ・今回、牧場と協力して事業を行ったが、牛のその時々状況によって、体験できる場所や内容が決まってくる。そのことを参加者に理解してもらうためにも、丁寧に事前説明を行うなど工夫する必要がある。



(担当：事業推進係 狩谷 順子)